

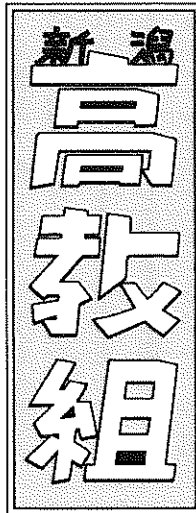


新高退通信

No.149

HP : shin-koutai.jimdo.com

mail : shin.koutai@gmail.com



発行所 / 新潟県高等学校教職員組合 / 新潟市中央区川岸町2-11 / TEL (265) 4151 / FAX (231) 1036 / 1部10円 (購読料は組合費に包含)

発行人 遠藤 丞

2024年9月1日 号外

新潟県高等学校退職者の会

事務局 〒951-8133 新潟市中央区川岸町2-11-4 (高校会館内)

退職者の会専用電話 025-265-1110



北プロ総会後の学習会で、「志賀原発を廃炉に！訴訟」原告団長で、珠洲市在住の北野進さんによる講演「能登半島地震を教訓に脱原発社会へ」が行われました。

パワーポイントで分かりやすい資料を使い、かつての珠洲原発予定地の現状、珠洲原発計画の概要と反対運動、志賀原発と珠洲原発計画の比較、能登半島地震の教訓を活かすにはどうするか、等について話されました。概要を報告します。(北プロ総会の報告は次ページ)

北プロ総会学習会
『能登半島地震を教訓に脱原発社会へ』
講師 北野 進 (志賀原発を廃炉に！訴訟原告団長)

能登半島の住民の暮らしは、元日に発生した能登半島地震を境に一変した。多くの人が亡くなり、大半の倒壊家屋、全壊判定の家屋が今だにそのままの姿で残り、復興への足取りの重さにはもどかしさを感じる。こうした中、もしここに原発事故が重なっていたらと思わずはいられない。

かつて関西電力や中部電力は、「原発は強固な岩盤の上に建てる。地震が来たって大丈夫」と豪語していたが、予定地の前を走る巨大な断層を全く把握できていなかった。ましてや隆起が起ころることなど想像すらしていなかったと思われる。

珠洲原発建設の計画は、1975年11月、市議会が立地の可能性調査を国、県に要望したところから始まる。過疎化の流れが止まらない珠洲市にとって、「地域振興の起爆剤」、「過疎脱却の切り札」とされた。

珠洲市からの要望に応え、19

84年、関西電力、中部電力、北陸電力が3電力共同開発として動き始める。市長と議会が推進の姿勢を鮮明にし、「原発反対はごく一部の市民だけ」という空気が市内を覆う中、転機となったのは1989年の市長選。原発反対票が過半数を超えたことから、市内の雰囲気は大きく変わる。

直後の関西電力による立地可能性調査を30日間の現地阻止行動、40日間にわたる市役所座り込みによって中断に追い込む。こうして2003年12月5日、電力3社による計画は「凍結」、さらには事実上の計画断念に至った。

珠洲原発は幸い阻止できたが、能登には志賀原発1、2号機がある。幸い2基とも13年間停止中で、最悪の事態をまぬがれた。しかし立地する志賀町は震度7を記録し、原発の北側の富来地区では甚大な被害があった。

敷地内では震度5強、399ガ

のトラブルや施設の損傷が明らかになっていく。もし稼働していたら、原子炉の緊急停止、原子炉の冷却といった作業を北陸電力はこなせたのだろうか。

北陸電力の対応は情報が小出しで、火災情報や津波情報、変圧器から漏れた油の量など、次々と訂正が重ねられた。

北陸電力の隠ぺい体質については、さらに重大な問題を指摘しなければならぬ。私たちが知る志賀原発内部の情報はすべて北陸電力発表情報だった。政党や国会議員による調査団、あるいは報道関係者の取材要請を北陸電力は拒否し続けてきたのだ。

珠洲市民はこの3年間、群発地震に悩まされ、翻弄されてきた。甚大な被害をもたらした今回の地震は、次なる大地震へのカウントダウン開始ではないのかという不安が、地震翌日から私の頭の中を離れない。

今回の地震では北陸電力や原子力規制委員会の想定をはるかに超える断層が動いた。志賀原発周辺には、M7クラスの地震が想定される活断層がまだ何本も走っている。この先、どのような規模の地震がどんな形で起こるのか、予知

につながる理論を構築するにはほど遠い状況であることも認識しなければならぬ。

今回の地震でもうひとつ明らかになったのは、現在の自治体の避難計画の内容のなさ、そしてその根拠となる原子力災害対策指針が破綻したということだ。陸路、海路、空路いずれも避難はできず、多数の家屋倒壊で屋内退避すらできない。

原子力規制委員会の山中伸介委員長は、「原子力災害対策指針の基本的考え方は見直さない」と明言し、問題を屋内退避の運用の検討にとどめようとしている。避難計画の根拠となつている指針の見直しに踏み込めば、稼働中の原発は停止を余儀なくされ、再稼働も進められないからだ。活断層審査の限界を自覚せず、原子力災害対策指針の破綻も認めない原子力規制委員会こそが危険な存在だ。

もちろんその背後には、原発回帰に突き進んできた岸田政権がある。

私たちは能登半島地震を最後の警告と受け止め、脱原発社会へと向かわなければならぬ。

北プロ定期総会

6月12・13日に石川県加賀温泉郷で、北陸ブロック第48回定期総会が開催されました。

担当単会は輪番で石川県退教でした。1月1日に能登半島大地震が発生した当初は、「今年はコロナ禍の1昨年までと同様に書面総会だろう」と考えていましたが、石川県退教の強い意志で通常開催となりました。

冒頭、角三石川県退教会長は「役員会で、『長く続く復興だ。元気の出る仲間の総会だ、通常開催しよう』と決めた」と説明。代議員3人に加え、現職の2人を含め11人の参加態勢を取ったことにも感激しました。

自分自身、担当年以外は事務的に対応してきたことに、組織の交流の重要性を強く認識しました。

総会は、石川県退教を含め、総勢29人で行われました。

議案(協議事項)は「安保関連3文書で『敵基地攻撃能力の確保』を明記し、武器輸

出原則を改悪するなど平和憲法の実質的改憲の動きが懸念されることに反対し、近隣国との軍拡競争の激化をやめて対話による友好関係を構築すべきこと」、「1月1日の能登半島を震源とする最大震度7の地震発生を受け、志賀原子力発電所等の被災が重大な人権問題を引き起こすことが予想され、地震多発の日本では原発からの撤退に抗し原発政策を逆戻りさせることは許されないこと」などでした。

役員体制は、会長に角三石川県退教会長、副会長に木村新高退会長他の各単会会長と決定しました。総会後の講演は、新潟も東電・柏崎刈羽原発差し止め訴訟を闘っていることから、学すべきこと、

教訓とすべき点が多くある学習会でした。

解散後、私も能登半島地震の現地を見ておきたく

で、石川県退教N氏の案内で輪島まで駆け足で巡ってきました。

(石野)



輪島の倒壊ビル

2024年度定期大会報告

第43回定期大会は6月26日高校会館で開催されました。

参加者は、代議員28人（定数32人）、来賓4人（新高教委員長・書記長、県退職者連合会長、新退教副会長）、顧問2人（木山・藤田）、本部役員8人の総勢42人でした。

中村副会長の開会挨拶のあと、2023年度中に判明した会員故人30人に黙祷を捧げました。木村会長の挨拶、遠藤承新高教執行委員長、山田太郎県退職者連合会長、神田久子新退教副会長から来賓の挨拶を受けました。

竹田日退教会長、水岡俊一・古賀ちかげの両参議院議員（日政連議員）からはメッセージが寄せられました。

2023年度経過報告と2023年度会計決算報告・所見を一括で報告しました。続いて平野伸一会計監査委員より2023年度会計監査報告が行われ、拍手で承認されました。

議事に入り、1号議案・2024年度活動方針を提案し、拍手で

承認されました。

2号議案の2024年度予算（案）については、『会費の予算額算出については、全員を対象として算出し、決算で未納数を明示すればいい。事務局で検討してほしい』と意見が出されましたが、新高退通信で本部意見を示すことで承認されました。

最後に、菊田副会長より議長団の労に対する感謝が述べられ、閉会の挨拶と木村会長の力強い「団結がんばろう」で終了しました。

【事務局より】

現在、3月中に振替伝票を会員配付していることで、多くの会員から会費を前年度末に納入していただいています。

そのため、新年度の会費として会員数で計上することは論理的に正しくないと考えて、年度末に入金すると予想される次年度会費を想定した概算値を会費予算額としてきましたが、意見に従い次年度からは会員数で計上します。

以下に、竹田邦明日退教会長のメッセージを掲載します。



日本退職教職員協議会

会長 竹田邦明

定期総会開催お

めでとうございま

す。新潟県高等学

校退職者の会のみなさまには、会員のつながりを大切に、平和・人権が大切にされる社会実現のため活動なされていることに、心から敬意を表します。また、日退教諸活動へのご協力に感謝申し上げます。

能登半島地震から半年になろうとしています。被災された会員のみなさまに心からお見舞い申し上げます。特に今回の地震で原発への恐怖が一層増しました。福島第一原発事故からすでに13年以上が経ちましたが、事故炉の廃炉見通しも全く立っていません。しかし政府は再稼働・新建設に前のめりです。脱原発社会を実現しなければなりません。

ロシアによるウクライナ侵攻が始まって2年4か月、イスラエルによるガザ攻撃も7か月を超え、犠牲者は増え続け全く希望の見えない状況です。岸田首相はアメリカ追随、「西側」一員としての姿勢をアピールするだけで、戦争終結にむけた積極的役割を果たさずとはしません。むしろ、アメリカの要請にこたえ、国内防衛産業を支えるとして「防衛装備移転三原則」を見直し、殺傷能力のある武器の海外輸出を解禁しました。また、「南西諸島の地対艦ミサイル防衛網を強化する」として「九州と沖縄を一体化した広域防衛網」の整備を着々と進めています。

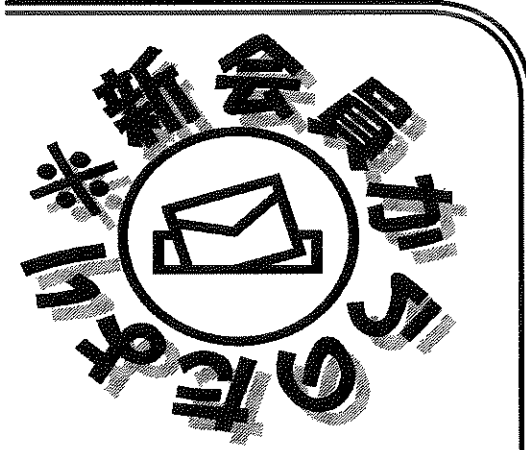
「改憲」の動きも急です。自公よりむしろ維新・国民が「緊急事態・議員任期延長改憲」の条文づくりに入れと迫っています。この次は9条2項です。近く行われるであろう総選挙、来年の参議院選挙・みずおか当選を勝ち取り、政治の流れを大きく変えなければなりません。平和のうちに生きる権利を保障した現憲法を守り、子どもたちの学ぶ権利、豊かな育ち

を保障する政治状況を作り出しましょう。

少子化に歯止めがかかりません。昨年の出生率は1・2と過去最低となりました。少子化対策にはジェンダー平等社会の実現、若者の雇用の安定化と収入増、安心して子育てができる環境・政策が何よりも必要です。「子ども・子育て支援」は未来の社会に対する投資です。企業を含め、社会全体で連帯し、子どもたちが、十分な教育を受けられたり、健康に過ごせたりするようになることで、よりよい社会を築くことになりま

す。社会保障を「高齢者の負担増と給付の削減」で乗り切れることはできません。世代間対立に煽られることなく、議論を進めていくことが重要で、退職者連合、地公退に結集しとりくみます。

をお願いし、メッセージといたします。



教師生活37年

新発田・村上支部 高橋直哉 (22)



小学生の頃、

「ど根性ガエル」という漫画をテレビで

よく観ていた。壮年の町田先生が主人公のヒロシに対して「教師生活25年、こんな経験をしたことがない！」と嘆くのが定番のシーンであった。白髪交じりで入れ歯というキャラクター設定のせいかな、子供心に「25年も働くとはあん

んだな。」と思っていたが、よく考えてみれば25年目の教員は50歳前後である。子供の頃に感じていた50代、60代は実はまだまだ若いことに自分がその年代になってみて改めて気が付いた。実際60歳で定年退職を迎えた多くの皆さんが再任用で働き続けることを希望している。

新採用の燕工業に始まり、柿崎、五泉、村上、新発田、新潟翠江と仕事をさせてもらった。

多くの人に出会い、人間的に成長させてもらったことに感謝している。特に組合活動を通して出会った人には多大な影響を受けた。自分もこういう人になりたいと思わせてくれる出会いがたくさんあり、現在の自分の財産だと感じている。

教師になりたての頃、漠然と母校の教壇に立ちたいという夢があった。図らずも46歳の時にその夢が叶い、時々高校生の頃にタイムスリップしながら実に楽しい時間を過ごすことが出来たが、その後のモチベーションが無くなってしまった。さらに追い打ちをかけるように定年延長で61歳が定年の年齢となった。マラソンに例えるならば、ゴール直前に来て急に係員

が飛び出してきて、「直前の人まではここがゴールですけど丁度あなたからもう1キロ先がゴールに変わりました。」と告げられたような感じで、走り続けるモチベーションが完全に消えた。これが59歳で早期退職したシンプルな理由である。

気力も体力も残っている60歳であるが、その気力と体力は教員とは違った世界で使おうと思っっている。一人の時はバイクに乗ったりキャンプしたり。たまに4人でやるゲームに誘ってもらったり。みんなこれまで出会った先輩方から教えてもらった趣味だ。まさに「教師生活37年、こんなに楽しい経験をしたことはない！」という心境である。

この先をどう生きるか。

柏崎支部 榎本 隆 (23)



1989年採用、同時に新潟高教組加入。栃尾分会青年部長、三条商業分会書記長、三条支部書記長、書記次長、長岡支部長、本部自主編成委員、柏崎支部長などを経験。現場の状況を訴

を訴

え、職場の環境改善と教育を守ることをめざし活動してきました。

35年の教員生活を振り返って、守るべきものとそのラインがぶれることがないように生活してきたつもりです。7校勤務のうち、定時制2回、A区分4回（途中でBに変更が1校）普通科は2回しかなく、なかなか楽しい教員生活を送らせてもらいました。卒業生を6回出し、8回修学旅行に行かせていただきました。本当に様々な経験させてもらったと関係された皆さんに感謝しています。生徒や親に嘘やいい加減なことを言わない、話を最後まで聞くというポリシーを持ちながら様々な場面に対応してきました。難しいことですが生徒と向き合うために大切なことだったと思います。

退職後、常々考えるのは、自分はその話を聞いた、何かを伝えたりすることが好きなのだ、ということ。その意味で退職してからは、少しさみしさを感じます。幸い妻と話す機会が多くなり、お互いに考えや思いを話し合ったり、笑い合ったりするおかげで、毎日を楽しく過ごすことができている。今後は私の今までの経験から、私より若い人たちに何

か伝えることができたいと考えています。教えるとか指導とかではなく、あることに一緒に取り組んで考えていければうれしいと思っています。

私は旅行と食べることが好きなので、そんなことを中心にして生きていくのではないかと思えます。どこかに何かを食べに行く、そんな旅行の計画をいつも考えています。地域に関わる活動とも思っていますが、まだ、何をするかはつきりしていません。ゆっくり考えているところです。この先どうするかわかりませんが、自分のできることを自分なりに精一杯取り組む、これも私のポリシーなので、なんとかなるかと思えます。よろしくお願いします。

38年の教員勤務とこれから

県央支部 山崎敦子（23）



2022年3月に退職し、無職です。

「人生最後に何したい？」と自問自答したら、「自民党政治を終わらせ、人を大切に世の中への流れを作りたい」

い」という思いがわきました。いやいや、先輩方、笑わないで下さいよ。本気でそう思ったんです。蟠螂之斧ですが、まずは入会した次第です。

昭和59年4月、有恒高校に新採用。雪深い板倉町で、学校総出で行う年1回の学校林の手入れ、春には、分会で公民館を借り竹の子汁（根曲がり竹とサバ缶）作りと思いは尽きません。

先輩教師から「どうもあんた空回りしてるね」と言われ、先輩女性教諭から「あの子はだめ、甘えん坊で」というのが聞こえてきてショックをうけたり。3年間は教職を辞めることをよく考えていました。私が働き続けられたのは、職が保証されている安心感も大きかったです。当時高田支部の組合加入率は90%以上。青年部活動、年に1回の組合教研も盛んでした。青年部活動で組合のイロハを学び、他校の同世代に沢山会えたのも、支えになりました。

昭和62年に糸魚川高校へ。平成3年に長岡向陵高校へ。平成8年から三条高校で勤務。このころ最終的に1校の最大勤務は8年というルールに変更されました。このルール変更は大きな変化

だったと感じています。

平成17年から五泉高校、平成20年から燕中等教育学校に勤務。勤務時間を超えて働くことが当たり前前の環境で、保護者からのクレームがダイレクトにぶつけられるメンタルに悪い職場でした。

教員に負担を強いてはじまった、燕中等教育学校なのに数年前に廃止する案が浮上しましたが、地域の反対で存続の方向へ。新潟県の教育行政は、県の実情に沿ったオ리지ナルな理念に欠け、長期的視点がないと痛感。

40代半ばで、ある英語の研究会で、教え込むこと一辺倒ではない授業に魅せられました。授業はライブだ、生き物だ、ゴールを先に設定して授業を設計せよというメソッドに出会い、まったく理想には届かなかったけど、授業の工夫をするのは楽しくなりました。

平成24年から加茂農林高校、平成29年から加茂高校に勤務し定年退職を迎えました。50代でようやく英語を教えることが楽しくなりましたが、体力もなくなり仕事はすっぱりやめました。

プライベートでは、ここ1、2年地域の公民館活動で「唱歌の会」「着物リメイク」「ブリービク

ス」に参加しています。持病の患者会と、わが子の問題に関する親の会の活動にも参加しています。時間に縛られず、体調に合わせてゆったりと暮らしています。

若い世代を見てみると、一回脱落するとなかなかレベルに戻れない、日本の異端を受け入れない閉鎖性硬直性を感じます。

こんな格差社会になるとは予想していなかったけど、若者に、年長者にはその責任の一端があると言われれば、その通り。

ちよつとでも社会参加できれば、と思っています。

再任用フル継続中

新潟支部 阿部浩治(23)



退職者の会は皆さまこんにち

この春、県立新発田高校を最後に定年退職し、退職者の会に加入させていただくことになった数学科の阿部浩治です。新高教には、栃尾高校分会、十日町高校分会、国際情報高校分会、新潟高校分会、新潟南高校分会、そして、新発田高校分会と新採用以来38年間、お世話になって

きました。組合活動が活発とは言えない分会に所属していたことが多く、活動も最低限のことしかやってきておりません。しかし、「困ったときに助けてくれる」組合という存在を無くしてはいけないと思ひ、「とにかく組合だけは辞めずにいよう」と思ひ、定年まで分会員を続けてきました。県立高校教諭の時代は、組合の活動を通じて、自分が所属している学校以外の状況を知り、他校の職員とも交流することができました。退職しても、もうしばらく県立高校時代のお仲間と関わっていただけらと思ひ退職者の会に加入することとしました。

県立高校は退職しましたが、現在は私立高校の教諭として、今までとほぼ変わらない勤務をしています。退職者の会の行事に参加することも、なかなかできないと思ひますが、皆さまの近況を伺ったり、新高教の情報に触れたりすることで、県立高校の状況を外から見守ることができればと思ひます。どうかよろしくお願ひします。

この人は今

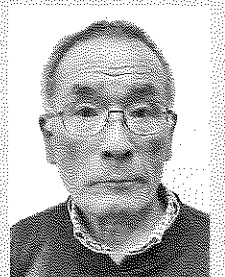
新潟支部 松月秀一(95)

北海道中薄白髪 最終回

新潟を出てすでに半月経ったが、10年前のロングクルージングで奥尻島まで来たことを思うと、今、やっと一歩を踏み出しただけのような気がして、行く先のあまりの遠さに押しつぶされそうな心持にさせる。この気持ちも年齢のせいなのか、これから先はすべて未知の海域という不安が覆いかぶさってのことなのか。

連れの手前、尻込みする姿勢など見せられないという気持ちと、連れがいるので力を合わせれば何とかなるだろうという気持ちもあり、若い時とは比べ物にならないほど小さくなってしまったが、先に何かがあるのかという『好奇心』に引きずられ、港を出ては北に針路をとっていく。

14日目の朝、須築漁港の脇を流れる須築川の河原で顔を洗い、冷たい水で引き締まった身体で大海原に飛び出す。



今日は積丹半島手前の岩内港が目標だ。穏やかな天気で風もなく、海も平らでほぼ機走で行く。10時頃、あまりに穏やかなので2人で相談し「岩内港に向かわず、このまま真つすぐ進み、積丹半島先端の漁港に入ろう」と2艇を岩内港から積丹半島先端の余別漁港へと変針させた。

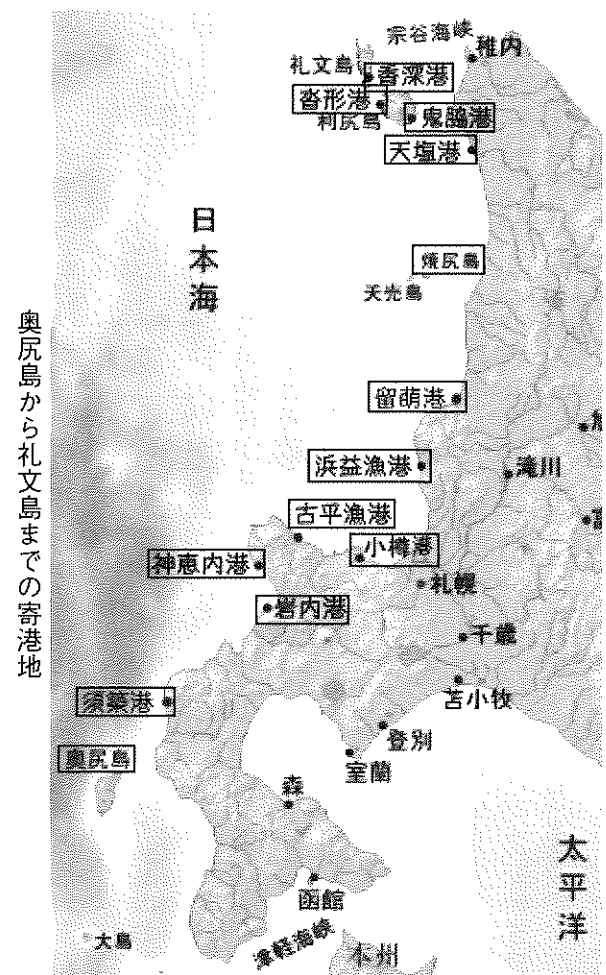
ところがこの変針が大変な結果を呼ぶこととなった。

黒々と前方に横たわる大きな半島を眺めながら、しばらくは平らかな海をのんびりと走る。しかし、半島に近づくとつれその大きさが増し、圧倒的な塊りとして迫ってくる感じさえする。そして少しずつ正面から風も出て、波も立ってきた。逆潮もあるのか艇速も弱まる。

その状況は半島先端部に近づくとしたがい強さを増し、距離的にはすぐそこなのに、GPSでは『余別まで3時間以上』と表示されるほどのろのろとしか進んでい

ない。それでも我慢して進むが、正面からの風も波も高まり、波しぶきが顔に吹き付ける状態に。神威岬を近くに見ながら2時間ほど頑張ってみたが、無理と判断し、「岩内に戻ろう」と携帯で確認し合い、再度、半島先端部より岩内方向に転針した。

転針後も横波でローリング（左の横揺れ）が激しく、岩内に向かう途中で、名も知らない港に緊急避難する羽目に。その避難で入った港は『神恵内（かもえない）港』だった。北海道唯一の原発から『泊原発』の隣の村だ。北海道からの帰路、ラジオで、「原発からの放射性廃棄物貯蔵場所の候補地調査に応じた自治体」というニュースを聞くことになる。



奥尻島から札文島までの寄港地

館方面より急流に逆らって日本海側に戻れるか、という2点だった。案の定、『積丹半島』というモンスタースターに一蹴された。

大きな船ならいざ知らず、我々のような8mそこそこで小規模な動力しか持たない船は、ちょっとした波や潮流にも翻弄される。陸から見ると、海の水はそこにとどまっているように感じるが、実際は常に流れている。その流れも水移動だけではなく、上下の移動もあり複雑に動いている。瀬戸内の『うず潮』などはその典型。それらの流れは、海岸線が突き出たところに強く現れる。岬（埼とか崎）とか半島と呼ばれるところ

だ。そこは潮の流れだけでなく、そこだけに吹く風もあり、今回の北海道での航海では、この『岬・半島』と名の付くところにことごとくいじめられた。

15日目。昨夕から「明日は出られる」と2人で確認していたので、朝、ビュービュー風が吹いていたが、5時、2艇で晴れた空の下、緊急避難した神恵内漁港から積丹半島の反対側『古平（ふるびら）漁港』を目指して出航した。

心配した半島先端部の海域も、ゆったりとした大きなうねりはあったものの、神威岬、そして積丹岬と不安なく無事越えて、穏やかな石狩湾に入ることができた。海が静かだったこともあり、11時50分、昼前には古平漁港に入るこ

とができた。積丹半島を越え、いよいよ北海道の核心部に入ったという気持ちの高まりを覚えた瞬間だった。

計画では先を急ぐ設定で、古平から石狩湾を

横断して対岸の『浜益漁港』に渡ることになっていた。しかし、ここまで来ると余裕も出て、ガツガツ先を急がなくても、見るべきものをしっかり見ていこうというところで、2人で相談して、小樽港に寄ることにした。

翌朝5時、さほど離れていない小樽港の中の『小樽マリーナ』を目指した。係留許可の連絡がつかない中の入港で、突然だったが、タイミング良く所長が棧橋について、事務所に近い一番いい場所に係留してくれた。ラッキーだった。距離が短かったので、入港時間は朝の9時30分で、いつもこのような航海だと楽なのだが。

小樽マリーナは、日本の中でも規模の大きい方で、国際的な港でもあり、かの石原裕次郎の愛艇『コンテッサⅢ』もシンボルとして展示されている。豪華な大型クルーザーや外国から来た大型のヨットも数多く係留されていて、それに比べると、2人の艇はあまりに小さくみすぼらしく見える。しかし、多人数で乗り込む艇とは違い、それぞれ1人で操り、こまめに来たのだという自負はあった。

2日目も強風で出られず、7月5日・6日と2日間、2人でゆっ

くり小樽の町を観光することができた。

7月7日、小樽マリーナを出て石狩湾に面した『浜益漁港』を目指す。いよいよ北海道も北の果ての海域に踏み込むことになるので、背筋の伸びる思いがする。

最初、波立っていた石狩湾も、後には落ち着いて穏やかになった。浜益港の入り口には一辺が3〜4kmもある巨大な四角の、ホタテ養殖用の定置網が設置されていて、前述したスマホのアプリ『ニユーベック』には、その範囲が赤く示されている。松原さんと相談して、それを外側から迂回して港に入ることにした。入港は13時55分。

北海道はホタテの生産地として有名だが、特に石狩湾は浅いので、湾を中心とした周辺海域に広く多くの大型ホタテ養殖用定置網があり、その場所を示す旗やブイに注意して航行しなければならぬ。

7月8日、漁師町の雰囲気がいよいよ浜益漁港を出て、次は規模の大きな留萌港に、7月9日、本島を離れ、沖に浮かぶ天売・焼尻という2つの小さな島のうち、手前の『焼尻港』に入る。焼尻島は小さ

な美しい島で、港には連絡船用のかわいらしい駅舎があり、駅長の猫が座布団の上で昼寝をしていた。翌日、少々波が高かったが、明日以降天気が崩れ本島に渡れなくなる可能性が強く、何も無いこの島にとどまるより今日のうちに本島に渡ってしまおうと、出航することにした。

途中までは波に悩まされたが、それも収まり、空も晴れ上がってきて、2mくらいのゆったりとしたうねりが押し寄せる海となり、不安なく、今回の航海では本島最北端となる『天塩港』に12時20分入港。新潟を出て21日目の7月10日のことだった。

ところが、最終目的地を目前にして、ここで4日間も足止めを食らうことになる。

原因は『やませ』だ。夏に北海道から東北の太平洋側に吹く風で、冷夏となり、作物の生育に障害を及ぼす悪名高い東の卓越風だ。雨が降ったり曇ったりと

いうことはそんなになかったが、10m前後の風が吹き、荒れた海となった。

天塩港には炊事場・トイレ・洗濯機など設備が整った大きなキャンプ場が隣接し、おまけにホテルのような温泉施設があり、4日間まったく不自由しなかった。しかし、目の前に大きく見えるはずの利尻岳(正式には『利尻山』)が一度も姿を現すことはなかった。

天塩での5日目7月14日の朝、風は残っていたが、2人で協議し「無理だったら戻ろう」との確認で、6時10分、2艇で最後の北上となる利尻水道に飛び出した。やはり、沖は相当の風と波で、



海から望む懐かしの利尻岳 (資料)

ともにくたくたになりながらも、利尻島の一番手前にある『鬼脇港』に入った。10時30分の入港。奥の岸壁は漁船が占めていて係留できず、東側が大きく開いた工事資材専用の岸壁に、建設会社の許可を得て着岸した。

この時、初めて

目の前に、恐竜のように針峰をまとった巨大な利尻岳が姿を現す。17年前、退職してすぐに、百名山の一番目の山ということで、一人で新日本海フェリー・列車・稚内からの連絡船と乗り継いで登った山だ。それが今、目の前に。懐かしく「ありがとう」とつぶやいた。

許可を得て係留させてもらった岸壁だったが、これがくせ者だった。港に入ってすぐの東側が開けたところなのだから、次の日の朝、『やませ』が強まり、開けた海面にジャブ波が立ち、2つの艇を岸壁にドンドンと打ち付ける。艇へのダメージと落ち着いた生活もできないことから、今日もここに留まるつもりだったが、2人で相談し移動することにした。この港では他に係留する場所もないので、港を出て、ここから数キロしか離れていない風の当たらない島の裏側(西側)の港に向かうことにした。これが大変な間違いだった。

風の当たるところ(表側)から風の当たらないところ(裏側)に移動するということは、必ず、その2つの界の境目(岬)を通過しなければならぬ。その認識がない中、8時15分この忌まわしい岸

壁を離れ、早く静穏な島の裏側に回り込もうと鬼脇港を出る。当然、正面からの『やませ』で、1・5mくらいの波が打ち寄せるが、それは承知の上。しばらくはまっすぐに沖に走り、後に右に反転して波を左横から受けながら岬に向かう。前述したが、岬は潮の流れも複雑で、この時は風も波も潮流も強い上、海底も浅く巨大な三角波（複雑な流れのところ）に発生する先の尖った三角形の波も発生していた。岬に近づくと4〜5mもの大波とうねりで、その中に巻き込まれ、戻ることもできない。転覆しないよう必死でティラー（舵）を握りしめ、一つ一つの波に対応して細かく舵を切りながら、そこからの脱出に全力をつくす。

大波との闘いは1時間くらい続いたのか、それでも少しずつ波の高さが弱まり、気が付くとなんとか岬を回り込んでいて先の方には大きな波が見えない。松原さんも無事で、脇を走っている。

「あー助かった」という思いが全身から湧き上がる。遠くに見えるが、松原さんのホッとした表情をものほっきりと感じ取ることができた。



島の裏側（西側）の『杵形港』には11時40分に入ることができた。大きな港で静かで天国のように思えた。

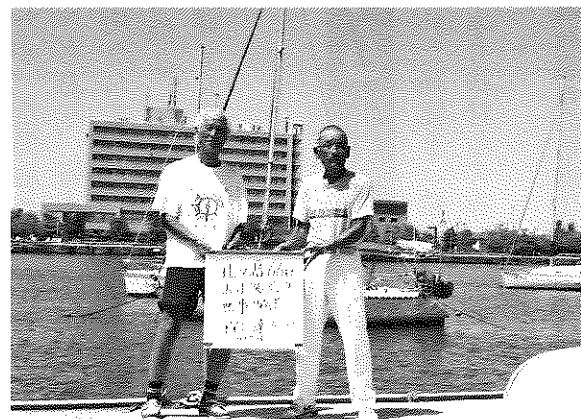
着岸して、落ち着いて考えてみると、艇の中は激しい揺れのためいろんなものが散乱してはいるが、2艇とも艇へのダメージはなく、なんとか危険な状況から無事に抜け出せたとはいえ、今回の行動は慎重な判断を欠いたもので、このような危険な状況に遭遇しないよう、安全な航海のため最大限の努力をする」ということで出発したのではなかったのか。あまりにも無謀な行動であったことに気づかされる。

翌日は風雨で停滞し、3日目の7月17日朝、礼文島に向け出航しようとして準備していると、
『日本丸』という大型豪華客船が入港してくるのが見え、こんな巨大な船も出入りする港なのだとその時知った。

さて、いよいよ日本海のどんづまり、最終目的地の礼文島だ。狭い礼文水道を挟み、すぐそこに見える対岸に渡るだけの航海だ。5海里程度なので、ゆっくり豪華船を見物して9時10分に出航する。大きな山のようなうねりに持ち上げられたりしながら、2時間ほどで礼文島の玄関口『香深港』に入港した。

さすが礼文島、大きなホテルがいくつも港をとり囲み、人気の観光地であることを感じさせる。港の中央部の岸壁に2艇を係留した。夕食、どの店も観光客でいっぱいに入らず、しかたなく港の方に戻つてくると、運よく港の真ん前の店に2人分の空席があり、最終目的地到達の祝杯をあげることができた。

次の日は出ることになっていたが、朝、風がビュービュー吹き、外海は白波が立っている。念のため漁師に聞くと「東風（やませ）も強まってきてい



無事新潟港に帰港した2人

て、今日の漁は中止になった」とのこと。松原さんと相談し、今日は停滞と決めた。この停滞が有効な1日となる。

2人で定期バスに乗り、島内の観光に。バスの終点で島の北端の『スコトン岬』に行った。空は青く晴れ渡り、真つ青な海が視界全体に広がっている。岬から海岸や丘の上を通る遊歩道を歩きながら、北の果ての『花の島』を存分に堪能することができた。

新潟を出てちょうど1か月、30日目の7月19日、礼文島『香深港』を出て帰路につく。（完）

帰路は1か月強（8・24新潟に帰港）もかかり、往路よりいろいろな苦難に遭遇するのですが、今回は

紙面の都合でここでペンを置きます。また、機会があれば紹介できるかもしれません。拙い文章で耻ずかしかったのですが、載せていただきありがとうございます。

日退教組組織代表者会議

「つながり、支え合いを深め流れを変えよう」

6月7日、日本教育会館で2024年度組織代表者会議(規約改正で、定期大会開催の次年度に開催し各単会1名の代表者が出席)が開催され、終了後、会場を移して結成50周年記念レセプションが開催されました。

当面する情勢と課題をふまえて、「2024年度当面の活動(案)」が提起され、以下の骨子について審議に入りました。

(1)「憲法改正に反対し。平和・人権・環境が尊重される社会をつくりたい」(改憲の動き、敵地攻撃能力、アイヌ新法の見直し、沖縄との連帯、日米地位協定の見直し、※「部落探訪」)

削除裁判など)
(2)「民主教育を守るとりくみ」(深刻な教員不足、教職員の長時間労働、教科書問題、子どもの貧困)

(3)「原発再稼働を許さず、脱原発のとりくみ」(原発事故



から13年、原発再稼働反対、ウクライナの原発危機、福島学習の旅)

(4)「格差是正、社会保障の充実、生活を守り、増税に反対すとりくみ」(物価上昇に追いつかない賃上げ、年金改革の課題、医療・介護制度の課題、マイナンバー制度による管理、監視社会)

(5)「組織の拡大と強化のとりくみ」(定年延長と再任用者の組織化、ジェンダー平等、日退教の組織。財政の見直し)

(6)「2023年度決算(案)」、
「監査報告(案)」

(7)「2024年度予算(案)」
質疑、応答を経てすべての案が「確認」(賛成多数による承認を「確認する」と規約で規定されている)されました。

次のことを付記します。
①現時点での日退教加盟単会は、県退教46、高退教16(北陸では新潟、石川)
②※「部落探訪」削除裁判は、事前に送付された活動

(案)にはなかったが、新潟地裁でも提訴ということもあり、修正案として提起し採用されました。ネット上で「部落探訪」削除裁判」と検索すると詳しく知ることができます。

MEMO

日退教が結成された経緯を『結成50周年記念誌』より抜粋してみます。

「日教組は男性退職教職員の組織化を、1970年の定期大会で方針化した。女性退職教職員は1968年3月に『退婦教』を結成していた。総評は1971年9月15日、『健康で安心して暮らす老後をつくる全国大集会』を東京で開いた。この集会は、日教組も他労組と同じく、退職者の組織化はかろうという機運を一層高めた。組織化準備委員会が1971、72年と開催され、各県・高の退職者組織の結成、全国組織への結集が呼びかけられた。結成当時、2つの柱が決定された。そのひとつは、社会保障、福祉政策の拡充を求める退職者の結集と、主体的、組織的とりくみをはかり、同時に立ち上がっている労働者の闘いを、より迫力あるものにする必要があること。

もうひとつは、現職中、「教え子をふたたび戦場におくるな」の合言葉で民主教育の確立、教職員の待遇改善等を中心に、熾烈な闘いや運動を進めながらも、一旦退職すればぶつ切りと絶縁されてしまう今の状態を、なんとか組織化して、退職者現職者の力を合せ、より強力な日教組運動を前進発展させようというものであった。」

右のような経過を経て、1973年9月14日、日本教育会館で「退職教職員全国連絡協議会」結成総会が開催されました。

新潟県高等学校退職者の会は、1982年5月23日の結成準備会、7月4日の結成大会を経て、柏崎(1983年2月・38人)、高田(1983年8月・25人)、直江津(1983年8月・15人)、新潟(1983年9月・28人)、魚沼(1984年10月・21人)、西蒲・燕(1984年11月・12人)、長岡(1984年12月・46人)、佐渡(1985年2月・11人)、三条・加茂(1985年3月・11人)、新発田・村上(1985年6月・40人)、新津(1986年2月・11人)の順に11支部が結成されました。

(木村)

新高教教研の講師として木村会長が話をします。『新高退会員の参加もどうぞ』ということですので、参加を希望される方は、新高退に連絡をしてください。
メール：shin.koutai@gmail.com 電話(水曜のみ)：025-265-1110 事務局長携帯：090-9679-3638

2024年度新高教第49次県教研開催予告

待っているだけではおとずれない「平和」は、つくり、つなげるもの

テーマ：「平和」をつなぐ！

1. 日 時： 2024年10月12日(土)
13:00~16:30
2. 場 所： 高校会館3階 大会議室
3. 形 式： 対面開催
4. 内 容： 全体会(講演会)と分散会

○全体会講師： **木村昭雄** さん(高校退職者の会会長)

(講師プロフィール)木村さんは旧新津市ご出身。1968年に高校教員に採用され2001年に退職。在職中は新高教平和教育推進委員として活躍。『架け橋』等数多くの編纂に携わるとともに、戦時中、教育や学校や労働等が如何に戦争遂行に荷担させられてきたか、今も残る本県の当時の資料を探り発信し続けてきた。(裏面参照)

○分散会：現場実践報告(修学旅行時の「平和教育」に関する事前指導等)
高校生平和大使からのアピール等

※テーマ決定の背景等について

(討議の柱)新高教においては、平和教育委員会が2010年に平和教育ガイドブック『新潟県内における韓国・朝鮮人の足跡をたどる』を刊行して活動の幕を閉じた。以来、平和教育実践の具体的発信がなく今日に至る。今年に入り、とある団体から「原爆ピアノの演奏会を高校で実現できないか」との要請が新高教にあったが結果的に受け皿になれなかった。

今、当たり前だと思われてきた平和が国内外で脅威にさらされ、平和を議論する場づくりが求められている。新高教として今後の平和教育実践の手がかりにしていくとともに、開かれた教研として組合内外に発信していくことが必要だ。

(情勢)2021年ロシアによるウクライナ侵攻、2023年のガザジェノサイドなど、戦時中と見紛うばかりの惨状が全世界に報道発信されている。紛争地では連日、多くの子どもたちをはじめ無辜の人々が戦火に戦き、尊い命が失われ続けている。

日本では、2015年の安保関連三法の成立以来、「戦争できる国づくり」が着々と進められてきた。戦争遂行前に必要な国民監視や有事の際に自衛隊の行動に資する法改正等があい次ぎ、2度と戦争をしないとの決意のもとに先人たちが築き上げてきた約束事(立憲主義、集団的自衛権違憲、専守防衛原則、国防費GDP1%枠、武器輸出三原則等々)が次々に反故にされ、日本国憲法の恒久平和主義原則が踏みにじられようとしている。

このまま国民的議論もせず、なし崩し的に自衛隊や非常事態条項などを盛り込む改憲を許すことはできない。国内外で戦争への危機が急速に現実味を帯びる中で、私たちは今どう考え、どう行動することが求められているのか? 「教え子を再び戦場に送らない」と誓った日教組・新高教の組合員として、今現場でどのような平和教育の実践が求められているのか?

戦後80年を来年に控え、第49次教研の柱に「平和教育」を位置づける。

『活動日誌』・点描

■事務局会議(4月3日) ■事務局会議(4月10日) 新加入2名、年間計画作成 ■事務局会議(4月17日) ■高教組・新高退年度初打合せ(4月17日) ■原発の市民検証委員会(4月21日) シンポジウム第2弾 ■事務局会議(4月24日) ■県中央メーデー(4月27日) 高教組とともに参加 ■事務局会議(5月1日) 「年度初・支部活動補助金と活動予定」 発出

■会計監査(5月1日) ■護憲フォーラムにいがた総会記念講演(5月7日) 『岸田自公政権が進める壊憲・改憲にどう対抗するか』講師飯島滋明さん(名古屋学院大学) ■事務局会議(5月8日) 定期大会議案の検討、『通信148』編集会議 ■中教審「質の高い教師の確保特別部会『審議まとめ』」に対する緊急街宣行動(5月13日) ■事務局会議(5月15日) ■役員会(5月15日) 旅費規程改訂、定期大会議案審議・任務分担、「第43回新高退定期大会について」 発出 ■事務局会議(5月22日) 『通信148』編集会議(初校) ■新退教第52回総会(5月24

日) 木村会長出席 ■『部落探訪』削除裁判報告集会(5月24日) 被告が新潟での裁判を拒否のため ■事務局会議(5月29日) 『通信148』編集会議(再校) ■『通信148』定期大会議案書』 発送(6月5日) ■事務局会議(6月5日) ■日退教代表者会議・50周年記念式典(6月7日) 木村会長出席 ■県退職者連合幹事会(6月11日) 木村会長、役員選考委員長に就任 ■北陸ブロック第48回定期総会(6月12日、13日) 石川県退教担当、加賀温泉で開催

■事務局会議(6月19日) 「中学校部活動の民間協力」で県保健体育課担当要請来局、連合本部役員の都知事選に関する発言に対する抗議を日退教に要請 ■事務局会議(6月26日) ■2024年度(第43回) 定期大会(6月26日) 全支部から28名の代議員出席 ■事務局会議(7月3日) 定期大会総括 ■教育をよくする県民会議幹事会(7月11日) 2025〜27県立高校等再編整備計画について ■事務局会議(7月17日) ■東電・柏崎刈羽原発差止め訴訟第44回口頭弁論(7月17日) 裁判長交代に伴う更新弁論 (石野)

編集☆集☆後☆記

北プロ総会学習会「能登半島地震を教訓に脱原発社会へ」、地震は私自身も怖いものの一つ、『地震・雷・火事親父』は言い得て妙だと実感だ。講演を聴き、再確認したのは、原発が無防備で地震の被害を増して怖いということ、それと海外の例と比しても国が国民を助けてくれないという事実だ。

先日、自主上映会で『原発をとめた裁判長』を見てきた。目から鱗だったのは、「裁判長は文系、短任期、超多忙だから難しいことを言っても分からない。原発を早く止めるためにも、裁判は高校生でも分かる論理で早く進めることが重要」ということ。新高退でもDVDを購入したので、視聴希望者はお申し出を。

新会員からのたより、定年延長、再任用制度、加入機会喪失などの理由で年々加入者が減少している。今年度は新会員数が5人と少なかったため、4人からのたよりとなった。

この人は今、3回に渡って寄稿していた『北海道中薄白髪』も今回で終わりとなった。原稿を

お願いした当初、海の上のことだからそんなに書くことがないかなと心配した。しかし、原稿を読ませていただくうちに、寄港地でのエピソード、失敗・苦労談など興味深い話が満載で引き込まれた。今回も利尻島を再訪できたことなど感動のクルージングだったことがよく分かる。

日退教組織代表者会議、修正案の『部落探訪』削除裁判は、鳥取ループ」を名乗る示現舎の宮部らが全国の被差別部落に潜入して、ネット上にその住所や墓石などをさらし、身元調査を容易にする暴露を続けていることに対する法的措置を求めるもの。(内山)

ご冥福を
お祈りします

(括弧内数字は現職退職年度)

- 田村 芳夫 さん (97) (柏崎支部) 4・11
- 宮崎 一郎 さん (94) (上越支部) 5・11
- 関根 直哉 さん (91) (新津支部) 6・8
- 吉澤 克博 さん (04) (上越支部) 7・15